



海外研修

海外研修日程 — ブラジル —

日時	プログラム	滞在先
7/26 (金)	関西国際空港発 フランクフルト着・フランクフルト発	機内泊
7/27 (土)	サンパウロ着	サンパウロ
	JICAサンパウロ出張所訪問	
	移民資料館見学	
	サンパウロ現地マーケット視察（教材収集） 振り返り	
7/28 (日)	サンパウロ現地マーケット視察（教材収集）	サンパウロ
	チエテ川流域環境改善事業（円借款）視察	
	市内視察（地下鉄・本屋）	
	振り返り	
7/29 (月)	サンパウロ州教育局訪問	サンパウロ
	市内視察（コンソラソン墓地、プリガデイロ駅、パウリスタ通り見学）	
7/30 (火)	PIPA（日伯援護協会）訪問	サンパウロ
	ISEC（教育文化連帯学会）訪問	
7/31 (水)	地域警察・交番訪問	ベレン
	サッカー博物館見学	
	サンパウロ発	
	ベレン着	
8/1 (木)	越智学園（JICAボランティア配属校）訪問・交流	ベレン
	INPE（アマゾン研究所）訪問	
	振り返り	
8/2 (金)	ベレン現地マーケット視察（教材収集）	トメアス
	ベレン→トメアス移動	
	ACTA（トメアス文化協会）訪問	
	農業祭参加	
8/3 (土)	トメアス移民資料館見学	トメアス
	CAMTA（トメアス総合農業協同組合）工場見学	
	小長野農場視察	
	ホームステイ	
8/4 (日)	トメアス→ベレン移動	ブラジリア
	ベレン発	
	ブラジリア着	
	振り返り	
8/5 (月)	ゴイアニア市へ移動	ブラジリア
	ペスタロッツ協会訪問	
	ブラジリアへ移動	
	JICAブラジル事務所訪問・報告会 JICAブラジル事務所員との意見交換会	
8/6 (火)	ブラジリア市内視察	機内泊
	ブラジリア発	
	サンパウロ着・発	
8/7 (水)	フランクフルト着・発	機内泊
8/8 (木)	関西国際空港着	

訪問先所感

7 / 27
Sat.

▶ JICAサンパウロ出張所訪問

村上ヴィセンテさんからブラジルについての概要や治安、日系移民等のことについて話を聞いた。大豆の生産が世界一、りんご（ふじ）の生産量は、世界で5番目、アサイーの存在などブリーフィングで初めて知ることが多く、移民された方々のこれまでの歴史を聞くなかで、農業の成功に至るまで数々の苦労や努力があったのだなと感銘を受けた。【宮本】



◀ 移民資料館見学

移民の歴史、農産物、生活用品などがわかりやすく展示してあった。当時の苦労について想像しメンバーと話しあった。資料館はビルの7～9階だったが、1階の大きな部屋で子どもたちが和太鼓演奏をしていた。1グループ10人程度で5、6グループはいた。大盛況で驚いた。寒い。【武田】

7 / 28
Sun.

▶ サンパウロ現地マーケット視察 (教材収集)

- 人々の生活（食文化）や休日の様子が分かった。「市場」にもそれぞれ売っているもの、値段、ディスプレイに違いがあった。また人々が値段交渉しながら買い物している風景にも出会った。
- リベルタージでは日本文化がブラジルに浸透していることを感じたが、アジア系の店舗も増えている現状であった。
- 通りで寝起きしている人もいて、社会格差を感じた。【松本】



◀ チエテ川流域環境改善事業(円借款)視察

川の氾濫防止のため川幅や深さを整備・維持する様子を視察した。1970年代後半からの経済成長に伴う人口増加と生活排水や工場排水に起因して、川の悪臭、埋め尽くすゴミ、水面に浮きだす泡が汚染を物語っていた。川の近くのファベラでゴミの回収がきちんとされていないことや、学校教育でゴミの分別回収を教えても行政が分別しないことなど、問題点を知った。【酒井】

▶サンパウロ州教育局訪問

7 / 29
Mon.

現在のブラジルの最大の教育課題は、「全ての市民が学校へ行き、教育レベルを向上させること」で、日本とかなり状況が違う。経済発展の著しい国だが、貧困層が大変多く、学校も半日単位で行なわれている。その仕組みを1日体制に変え、レベル向上を果たすためには、教員の養成と質の向上、教材の開発が必要であることが理解できた。多人種が混在する国で多文化が共生出来るような教育がなされている。日本の教育が進んでいるとはいえ、学ぶべき点がたくさんある。【西田】



◀PIPA(日伯援護協会) 訪問

7 / 30
Tue.

ブラジルでは自閉症児に対して薬物治療が中心でさまざまな問題があるが、PIPA では生活療が行われており、自立を目指して生徒ができることを増やし、また学校でしていることを家でもできるように、家庭でも連携して取り組んでいた。PIPA に入って偏食や昼夜逆転が治り、規則正しい生活が送れるようになっていた。【酒井】



▶ISEC(教育文化連帯学会) 訪問

ブラジル帰国生徒支援の先生から子どもの帰国後の様子をお聞かせいただき、帰国後の苦労を思い返ることができた。現在日本にいるブラジルの子ども達へ「どの言語でも良いので学習言語を確実に身につけさせてあげてほしい」という指針をいただき、今後の参考になった。

帰国者支援のお話もお伺いし、必要な仕事を自ら立ち上げられ、困っている方を支えておられる地道な姿に頭が下がった。【西田】



▶地域警察・交番訪問

7 / 31
Wed.

「地域を1つの家族のように接する」と警察の方がおっしゃっていて、学校教育と似ているものを感じた。日本の交番制度の良いところを取り入れ、犯罪率が明らかに少なくなった事実を知った。犯罪者のことばかり考えるのではなく、日頃から近くの住民のことを考え、話を聞くうちに、地域が1つに団結できるようになった。ブラジルの警察には州の警察や地域の警察など様々な組織があることを知った。【藤原】



◀サッカー博物館見学

- サッカーがブラジルに浸透していることを知ることができた。
- これまでサッカーがブラジル社会で大きな役割を果たしてきたことだけでなく、今後控えているワールドカップやオリンピックへの人々の注目度の高さもうかがえた。【松本】



8
1
Thu.

▶越智学園(JICAボランティア配属校) 訪問・交流

日系生徒3割、その他7割で、モンテッソーリ教育により、学習環境を整え、一人ひとりの自立を支援し、自主的に学ぶことを目標として教育していた。理念や取り組みは興味深く、今後勉強していきたいと思った。授業交流では、全学年の児童約30人が集まり、好きなこと、歌、折り紙の交流をし、有意義な時間となった。【酒井】



◀INPE(アマゾン研究所)訪問

アマゾンの森を監視し保護するための施設での研修で、詳しい説明をきき、質問に丁寧に答えてもらった。大満足。ただ、「大自然の中にある冷房がガンガン効いた建物」というのは「ずいぶん不自然だな」と思った。しかしとにかく、自然保護の最前線に立っていることに興奮した。【武田】

8
2
Fri.

▶ベレン現地マーケット視察 (教材収集)

警護してもらいながらゆっくりと見学。モノランゲージに使えるものを探しつつ、たくさんの物を購入した。他の場所では見られなかった陶器も発見！ブラジルではベレンぐらいだろうとのこと。信楽の子どもたちにはぜひ披露したい。【永井】



◀ACTA(トメアス文化協会)訪問

移民の方の苦勞のほんのひとかけらを知ることができました。「個人ではできないことでも団体となったらできることがある」とおっしゃっていたように、利益ではない人とのつながりを大事にした活動に共感しました。【山本】

8
3
Sat.

▶CAMTA(トメアス総合農業協同組合)工場見学

話を聞いた組合の理事をされている坂口さんは、私と同じ和歌山県の西牟婁郡出身だと聞き、親近感がわいた。初め 1931 年に野菜組合、1931 年にアカラ産業組合、終戦を迎え 1949 年に農業組合（CAMTA 組合）が創立されたそうだ。農業での苦労は、文化協会で聞いたこととほぼ同じで、みなさん苦労をされたんだなと重ね重ね感じた。坂口さんが「今、やっと軌道に乗ってきたところ。夢はすてちゃいけない！」そう話してくれたことがとても印象に残り、私たちへの強いメッセージだと心に響いた。【宮本】



◀小長野農場視察

「自分達が荒らした畑をできるだけ再生したい」その思いで原住民の方の「教育」を通してアグロフォレストリーを実現させた小長野さんの生き方に感銘を受けました。この精神をしっかり子ども達に伝えたいと思いました。【山本】

▶ホームステイ

- 農場を見学させてもらい、アグロフォレストリーとは異なる多品種同時栽培について学ぶ。
- 夜の熱帯雨林と、星空の美しさに感動する。
- 納豆、焼き鮭などの日本食もいただいた。懐かしい。【中西】



8
5
Mon.

▶ペスタロッチ協会訪問

園芸療法・飲食業や銀行業務に就くための研修・芸術品制作など、いろいろな活動を説明していただいた。低所得家庭が 85%で、支給される賃金も最低賃金の 600R と聞いて、考えさせられた。【永井】



◀JICAブラジル事務所訪問・報告会

- メンバーの感じたことや学んだことを共有できてよかった。
- 今後のブラジルは都市問題の解決が大切（交通渋滞・川の汚染）
- ブラジルは新興国として他国に援助している（モザンビーク・アンゴラ・南米諸国）
- 移民が多く、それぞれの国の文化を残している（祭りや言葉）
- 黒人に対する差別の名残あり 【原田】



▶ブラジル事務所員との意見交換会

「研修で感じたブラジルを、そのまま子どもたちに伝えてほしい」とおっしゃっていた。様々な人種が住むブラジルという国だからこそ、様々な人の考え方・性格が理解できる。子どもたちが国際的な視野を持てるように、この研修を活かしていこうと思う。【藤原】



同行者より

海外研修に同行して

独立行政法人国際協力機構
関西国際センター（JICA 関西）
国際協力推進員 京都府担当 森 万佐子

地球の反対側で日本から最も遠い国の一つ、ブラジル。経由地のドイツを経て、2日間かけて行った道のりはとても遠く感じましたが、そこには多くの感動と出会い、そして多くの「日本」がありました。

例年よりも遠く、長期間となった今回の研修。ブラジルはとても広大で、都市間の移動は飛行機、そして真冬のサンパウロから真夏のアマゾンまで同じ国とは思えないような多様な気候、混在する多文化を目にし、ブラジルという国の奥深さを感じました。日本との往復も入れて14日間のスケジュールはとてもタイトでハードではありましたが、参加の先生方は、一つひとつの訪問先で話を聞き逃すまい、と真剣にメモを取り、出会った多くの方々の考え方や思いを聞き、車窓から見える物事からも感じ、考えたことを語り合い…、このような学ぶ姿勢に溢れた先生方との密度の濃い14日間を過ごせたことは、私自身にとっても大きな学びになりました。



訪問先も多岐に亘りました。日本の協力で改善された生活環境や治安状況、森林保全の取り組みなどのODAの視察、また日系社会にも訪問し、日系社会青年ボランティア※の活動現場である学校では交流授業も行ないました。特に印象的だったのは、トメアス日系社会への訪問ではないでしょうか。何もないところからアマゾンを開拓して農業を始め、現在では環境に配慮した新しい農業「アグロフォレストリー」を展開し、それを小農家の収入向上のために普及する活動など、ブラジル社会に大きく貢献しています。日本から遠く離れた国で活躍する日系移民の方々と交流し、ホームステイで寝食を共にさせていただいたことも大きな感動でした。

参加者が校種、地域、年齢差を超えて交流し、違う目で発見したことを共有できるのも、この研修の面白さの一つだと思います。同じ日程を過ごしてきても、目にしたことを異なる観点でそれぞれの心でしっかりと受け止めてきたということが最終報告会での共有の場面で報告されました。そこには、一概には語れない開発の矛盾に戸惑ったり、自身の心が大きく揺さぶられ、何をどう伝えればよいのか迷う先生方の姿もありました。「(子どもたちに) ブラジルで感じたことを、いいことも悪いこともそのまま全部伝えてほしい」JICA ブラジル事務所の方からの言葉を受け、それぞれの思いを胸に海外研修は終わりました。

先生方は帰国後もブラジルに対する知識をより深め、互いに情報を共有し続けています。多面的なブラジルを取り扱う中で、自身が何をどのように子どもたちに伝えたいのか、それぞれに、深く考え授業を実践されています。先生方の学び、実践、子どもたちの気づき、その一つひとつが宝物です。今回の研修に参加された先生方を通じてブラジルや世界について考える機会を得た子どもたちが、将来の日本、そして世界を担う一員として大きく成長してくれることを願います。Muito obrigada！（ポルトガル語で「ありがとう」）

※日系社会青年ボランティア：中南米の日系社会で自分のもっている技術や経験を活かしてみたいと言う強い意志を持った方々を派遣し、日系人、日系社会の人々と、ともに生活・協働しながら中南米地域の発展に協力していただく JICA ボランティア。